紀尾井だより

5/6
May / June
2024
Vol.165

ピアノ・トリオ・フェスティヴァル 2024
トリオ・ヴァンダラー
葵トリオ
金川真弓・佐藤晴真・久末航トリオ

［インタビュー］
竹本千歳太夫・豊澤富助
難曲『菅原伝授手習鑑』「丞相名残」を語る

連載
［クラシック音楽のテーマに基づく3つの話］
ピアノ・トリオをめぐる3話

紀尾井ホール

Featured Artists

ピアノ・トリオ・フェスティバル 2024

そういえば案外なかったかも――。ピアノ、ヴァイオリン、チェロの三重奏による「ピアノ・トリオ」はしばしば、「3人のソリストが個性をぶつけ合い、火花を散らすスリリングさが魅力」と言われ、それゆえに「祝祭的」とも言われるのですが、実際にフェスティバルとしてピアノ・トリオだけにスポットを当てる機会は、そう頻繁にはありません。しかも出演は、この分野を牽引するフランスのベテランから、日本の気鋭の奏者たちによる新結成グループまで多士才々。注目必至のピアノ・トリオのお祭りです。

往年の「百万ドル・トリオ」が、じつは折り合いが良くなくて、セッションはバチバチだったなどというエピソードもあり、「ピアノ・トリオはそれでいい、いや、そのほうがいい」とさえ言われます。でも、そんな「野武士的」なイメージに捉われすぎると、トリオの多様な魅力を見失うかもしれません。緊密な調和が必要なのは言わずもがな。「三重奏」であるのはもちろん、高音部と低音部を1セットと考えれば、ピアノの右手＋左手と、ヴァイオリン＋チェロの「二重奏」でもあるのです。ある意味変幻自在。結果として3人それぞれの個性が浮かび上がってきて、弦楽四重奏が4人でひとつの声を奏でるのに対して、三重奏は3人がそれぞれの声でぶつかり合うことになる。それがピアノ・トリオの大きな魅力でしょう。「ピアノ・トリオ・フェスティヴァル」は、3組のトリオの至芸をじっくり味わうチャンスです。

トリオ・ヴァンダラー

© Marco Borggreve

葵トリオ

© Nikolaj Lund

© Victor Marin

© Seiichi Saito

金川真弓・佐藤晴真・久末航トリオ

© Janine Guldener

世界を牽引しつづける トリオ・ヴァンダラー

フェスティヴァルのスタートは6月のトリオ・ヴァンダラー。1987年、当時パリ音楽院の学生だったヴァンサン・コック(ピアノ)、ラファエル・ピドゥ(チェロ)らによって結成。1995年からはヴァイオリンが現メンバーのジャン＝マルク・フィリップ＝ヴァルジャベディアンに代わっています。結成翌年には難関として知られるミュンヘンARD国際音楽コンクールで最高位(1位なしの2位)を獲得するなど、つねに世界のピアノ・トリオ界を牽引し続けてきました。彼らのようにトリオの活動にプライオリティをおいて活動している常設のグループは珍しく、文字どおり、押しも押されもせぬこの分野のトップランナーです。

プログラムは、20歳のブラームスが書いた美しいピアノ三重奏曲第1番(晩年の改訂版ではなく初版で)とシューベルトのピアノ三重奏曲第2番。ちなみにフランスのトリオですが、グループ名の「ヴァンダラー」はドイツ語で「さすらう者」。歌曲や《さすらい人幻想曲》などを始め、「さすらい」はシューベルトがとくに好んだ、ロマン派の精神の象徴ともいえる主題。つまりシューベルトは彼らの原点といえるでしょう。

日本のピアノ・トリオ界に再び光を当てた立役者 葵トリオ

続いて10月には躍進続く葵トリオが登場。今年の春まで3年にわたる「紀尾井レジデント・シリーズ」で、このホールをホームグラウンドに、「シューマン」をテーマに据えた全3回のプログラムを繰り広げたトリオ。紀尾井での新章がこのフェスティヴァルでスタートします。秋元孝介(ピアノ)＝A、小川響子(ヴァイオリン)＝O、伊東裕(チェロ)＝Iで「AOI(葵)」。2018年にミュンヘン・コンクールで優勝した彼ら。ともに関西出身で東京藝術大学・大学院で学ぶ3人が、2016年にサントリーホール室内楽アカデミーで出会ってトリオを結成しました。

生誕150年のシェーンベルク《浄夜》をメインに、コルンゴルト、ツェムリンスキーという世紀転換期のウィーン・プログラム。といっても、どれも19世紀ウィーンが濃厚に薫る、後期ロマン派らしい調性的な作品です。《浄夜》を編曲したエドゥアルト・シュトイアーマンはシェーンベルクのピアノ協奏曲の初演ピアニストであり、私的演奏協会にも参加した、シェーンベルクを身近に知る作曲家。原曲の六重奏を見事にピアノ三重奏に置換しています。

若きスターたちが日本でお披露目 金川真弓・佐藤晴真・久末航トリオ

年が明けて2025年2月の金川真弓・佐藤晴真・久末航トリオは3人の若きスター奏者たちによる新生ユニット。日本でのデビューを飾ります。ミュンヘン・コンクールで日本人チェロ奏者として初優勝を果たした佐藤。久末も同コンクールで、金川はチャイコフスキー、ロン＝ティボーの両コンクールで上位入賞するなど注目の3人。彼らはベルリンで学び、同地を拠点としている仲間でもあります。2020年にベルリン日独センターのニューイヤーコンサートで初共演。彼らの活動をウオッチし続けてきた紀尾井ホールが、ぜひ日本でもやろうと声をかけ、この日本ツアーが実現したとのこと。金川と佐藤は日本製鉄音楽賞の受賞者でもあり、ホールとの縁も感じる経緯です。

チャイコフスキーの《偉大な芸術家の思い出に》をメインに、グラミー賞も受賞している現代アメリカを代表する女性作曲家ジョーン・タワー(1938～)の《ビッグ・スカイ》、そしてカール・ライネッケが編曲したベートーヴェンの《三重協奏曲》。ベートーヴェンは協奏曲からソロ楽器3つだけを取り出して明らかに声部が足りないわけですが、管弦楽のイメージを保ちつつ原曲の室内楽的な要素を強調した名品です。

ステージ上の奏者たちが視線で交わす対話にも注目しながら、彼らと同じ時間と空間を共有し、一体となって音楽に身を委ねるのは室内楽の醍醐味です。調和と個性のどちらもがくっきりと浮かび上がるピアノ・トリオを国内屈指の室内楽ホールで聴けば、その醍醐味が、いっそうヴィヴィッドに迫ってくるに違いありません。

文／宮本明(音楽ライター)

Ⅰ トリオ・ヴァンダラー

6/28 金 19:00

[出演]
ヴァンサン・コック(ピアノ)
ジャン＝マルク・フィリップ＝ヴァルジャベディアン(ヴァイオリン)
ラファエル・ピドゥ(チェロ)

[曲目]
ブラームス　：ピアノ三重奏曲第1番ロ長調 op.8(1854年初版)
シューベルト：ピアノ三重奏曲第2番変ホ長調 op.100, D929

Ⅱ 葵トリオ

10/3 木 19:00

[出演]
秋元孝介(ピアノ)
小川響子(ヴァイオリン)、伊東裕(チェロ)

[曲目]
コルンゴルト　　：ピアノ三重奏曲ニ長調 op.1
ツェムリンスキー：ピアノ三重奏曲ニ短調 op.3
シェーンベルク(シュトイアーマン編)：浄夜 op.4(ピアノ三重奏版)

Ⅲ 金川真弓・佐藤晴真・久末航トリオ

2025 2/13 木 19:00

[出演]
久末航(ピアノ)、金川真弓(ヴァイオリン)、佐藤晴真(チェロ)

[曲目]
ジョーン・タワー：Big Sky
ベートーヴェン(ライネッケ編)：ピアノ、ヴァイオリン、チェロのための三重協奏曲ハ長調 op.56(ピアノ三重奏版)
チャイコフスキー：ピアノ三重奏曲イ短調 op.50《偉大な芸術家の思い出に》

Ⅰ～Ⅲのお得な3公演セット券　好評販売中!

番外編 三菱地所 presents 紀尾井 明日への扉 第42回
トリオ・エクス 2025 2/27 木 19:00
[曲目] レベッカ・クラーク:ピアノ三重奏曲 ほか

ARTIST Interview

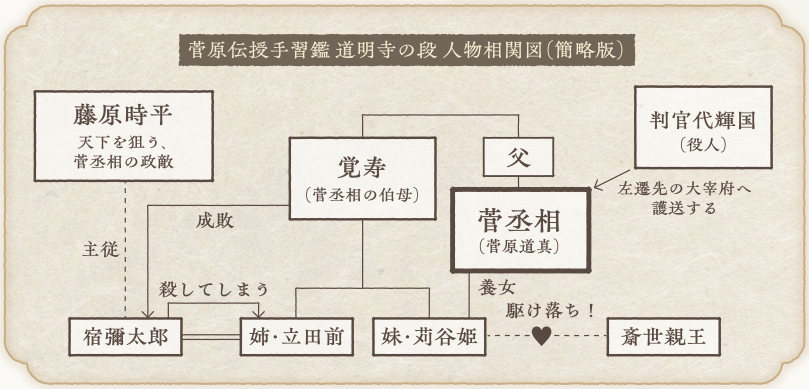
竹本千歳太夫・豊澤富助

難曲『菅原伝授手習鑑』「丞相名残」を語る

聞き手／富岡 泰（演劇評論家）

浄瑠璃三大傑作の一つである『菅原伝授手習鑑』の二段目「道明寺」。今回の公演では「杖折檻の段」以降の三段を取り上げます。中でも「道明寺の段」のクライマックスである「丞相名残の段」は数ある浄瑠璃の中でも格調が高いとされ、『仮名手本忠臣蔵』の「山科閑居」、『嬢景清八嶋日記』の「日向嶋」と並んで、紋下（人形浄瑠璃一座の代表者で第一人者の太夫）でなければ語れない段とされてきました。この難役に竹本千歳太夫と豊澤富助のお二人が、どう取り組んできたかをお聞きしました。

© 堀田力丸



「丞相名残」との出合い

千歳太夫　おなじ『菅原』でも、「寺子屋」はよく上演されますが、「道明寺」は滅多に舞台にかからない上に、手掛けようとする人も少ないので、そもそも触れる機会が稀なのです。初めて「丞相名残」の舞台に接したのは、昭和47年5月の国立劇場で「天保期以来百四十年ぶり」とされた全段にわたる『菅原』の通し上演です。上演に先立ってNHKラジオで放送された、四世竹本越路太夫・二世野澤喜左衛門両師匠の演奏を聴いたのが本当の「最初の出合い」になります。このころの私はまだ入門前で、「太夫でやっていこうかなあ」と何となく思ってはいましたが、この演奏を聴いて「あぁいい浄瑠璃だなぁ」と惚れ込みました。

富助　本当に？ 私も初めて接したのは同じ時期ですが、既に野澤勝太郎師に弟子入りしていたので、国立劇場裏の楽屋や廊下に響いてくる音色に耳を澄ませました。でも千歳さんのように惚れ込むというより「これは大変な役だ」というのが率直な印象でしたね。三味線弾きとしては避けて通れるものなら避けたいくらいの難曲です。「寺子屋」は素人さんが稽古することもあるけれど、「道明寺」はそうはいきません。

千歳太夫　「丞相名残」の魅力は、まず文章が素晴らしい。「身は荒磯の島守と」とか、「道明らけき寺の名も」といった美文に、これ以外はないという節がついている。

富助　三味線の手数も節の種類も多いのですが、決して弾きまくるようにはしません。「丞相名残」は後半「輝国四方を打ち眺め」から調子が上がり、そこからが長いんです。手数も多いのですが決して流されるように弾かない。リズミカルにどんどんといかないようにします。ほかの作品は明治になってから節付けが変わっているものが多いのですが、「丞相名残」は初演からほぼ変わらない。それも名曲である証しでしょう。

丞相の品格・覚寿の品格

千歳太夫　初めて語ったのは鶴澤燕二郎（現・燕三）さんとの勉強会（平成6年7月）で、越路太夫師匠にお稽古をつけていただきました。やはり言われたのは「丞相の品格」ですね。のちに神様になる人ですから、人間臭い情愛をはっきりと表に出さないように語ります。基本的な心得では「ゆっくり語ると上品になる」とされますが、闇雲にゆっくり語ったら、その場面は良くても段々全体の寸法が合わなくなってしまいます。生の感情を解き放たないで内向きに表現するのが大事でしょう。

富助　私も先代の鶴澤燕三師匠にお稽古をつけていただいた時、丞相が「涙の玉の木槵樹」で落涙するところに「チン、チン」と三味線の手が付いていますが、この音色を「大きく響かせたらあかんで」と教わりました。

千歳太夫　覚寿の品格も大切です。昨今、前半を二つに分けて上演されることが多いですが、今回は私たちで全段を演奏します。一人で全段語ると覚寿の人物像が伝わりやすいと思います。覚寿が宿禰太郎の立田殺しを見抜き、自ら成敗するところ。彼女の太郎を仕留める気丈さ、真実を見抜く賢さ、娘達や丞相に対する情愛深さなどがより表現されると思います。丞相を最初に見送ってから、太郎や輝国に絡んで物語を進行させるのは覚寿ですから、丞相に次ぐ品格を持つ覚寿の性根を、しっかり伝えなければなりません。

神様と人間の狭間

千歳太夫　後半、丞相は非常にゆったりした運びの中を行きつ戻りつ歩いて行きます。神様の間は人間の感情を表に出さない。娘の苅屋姫とも「我が身には合はぬ筈」と会おうとしない。それでもやっぱり人間だから「子鳥が鳴けば親鳥も、鳴くは生ある習ひぞ」と涙をこぼす。ゆっくりと螺旋を描くように進みながら、神様と人間の間を行きつ戻りつしていく感じですね。「鳴けばこそ、別れを急げ鶏の音の、聞こえぬ里の暁もがな」の歌で、悲しみを昇華させる。この一段はこの歌を舞台化したようなものです。最後に「嘆きの声にただ一目、見返り給ふ御顔ばせ」で娘の顔を見返るのが、人間らしさの表れでしょう。

（とみおか・やすし）

紀尾井たっぷり名曲7義太夫節
菅原伝授手習艦
道明寺の段

7/9 火 17:30

解説　児玉竜一

「杖折檻の段」
浄瑠璃／竹本千歳太夫、三味線／豊澤富助

「東天紅の段」
浄瑠璃／竹本碩太夫、三味線／野澤勝平

「丞相名残の段」
浄瑠璃／竹本千歳太夫、三味線／豊澤富助

クラシック音楽のテーマに基づく3つの話

ピアノ・トリオをめぐる3話

名だたる作曲家がこぞって書いたピアノ・トリオ。どのように生まれ、発展してきたのでしょうか。

1 ピアノ・トリオの黎明期

ピアノ・トリオ*は18世紀半ばに現れたジャンルです。それ以前の、類似した楽器編成（つまりヴァイオリン、チェロ、鍵盤楽器）で演奏可能な器楽曲では、鍵盤楽器は通奏低音の伴奏に加わるだけであることが圧倒的に多かったのですが、ピアノ・トリオは鍵盤楽器に重点が置かれるようになり、18世紀後半を通じて大量の作品が印刷等で流通するようになりました。

我々がよく知るこの時期のヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）とヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）の作品もほとんどの場合出版を（も）想定していました。つまり、アマチュアの需要を反映する傾向のあったジャンルだったのです。その背景にはピアノが新たなタイプの鍵盤楽器として普及し始めたこともあるでしょう。

リラ・キャボット・ペリー『三重奏（アリス、エディス、マーガレット）』

2 「ウィーン古典派」の模範と19世紀ドイツ語圏の系譜

ピアノ・トリオが重視されるようになった背景には、上記の2人にルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770～1827）を加えた、いわゆる「ウィーン古典派」の存在があります。特にモーツァルトとベートーヴェンはチェロの役割を拡大し、ピアノの左手をなぞるのではなく、独自の旋律を担当させるようにしました。その傾向はフランツ・シューベルト（1797～1828）にも見られ、19世紀の作曲家たちの模範になったと思われます。

彼らの影響下でピアノ・トリオは少なくとも創作量から見て弦楽四重奏曲に次ぐ室内楽の主要なジャンルになりました。ドイツ・オーストリア圏に限ってもフェリックス・メンデルスゾーン（1809～1847）、ローベルト・シューマン（1810～1856）、ヨハネス・ブラームス（1833～1897）、さらにはエーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト（1897～1957）と、その系譜は容易に見出されるでしょう。次々に創作が積み重なり、腕に覚えのある作曲家たちは先人を越えようとピアノ・トリオへ立ち向かったのです。その結果、このジャンルは大規模化し、演奏技術の点でも職業演奏家に相応しい高度化を果たし（愛好家向けの出版需要も存続したが）、公開演奏会が作品発表の場となり、そうした変化が規範的ジャンルの価値を高めたと思われます。

3 インターナショナルなジャンルへの変貌

となれば、シンフォニーや弦楽四重奏曲と同様に、19世紀中頃までには他の国・地域の作曲家たちの傑作が目立つようになるのも必然。ドイツ語圏経由のインターナショナルなジャンルへ変貌を遂げながらローカルな味わいをも育むという構図も見てとれます。例えば、ロシア。西欧志向が濃厚とはいえ本国を本拠地にしたピョートル・チャイコフスキー（1840～1893）の《偉大な芸術家の思い出に》は同国のピアノ・トリオ発展に画期的な意味がありました。それ以前の創作例は皆無ではありませんでしたが、この作品が発表された1880年代序盤以降、アントン・アレンスキー（1861～1906）、セルゲイ・タネーエフ（1856～1915）などの力作が現れます。若きセルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）が1890年代序盤に書いた2曲の《悲愴的三重奏曲》もチャイコフスキーの伝統から派生していったと見てよいでしょう。

20世紀ソ連を代表するドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～1975）のトリオ2曲も同様です。第2番Op.67（1944年）は友人の死を悼んで作曲されていますが、これは親友だったピアニストのニコライ・ルビンシテイン（1835～1881）の追悼を創作動機とするチャイコフスキー以来の伝統を汲んでいました。ピアノ・トリオというジャンルは同地では他の地域にない新たな意味さえ付与されるようになったのです。

*ピアノ・トリオという場合は厳密には楽器編成は一定でありませんが、ヴァイオリン、チェロ、ピアノという編成が一般的で、本稿もそれに従います。

文／安田和信
（桐朋学園大学准教授）

ピアノ・トリオ・フェスティヴァル 2024

詳細はP.2・3特集ページをご覧ください。

紀尾井ホール室内管弦楽団（KCO）
新メンバーのご紹介

2024年4月1日付で、紀尾井ホール室内管弦楽団に新しいメンバーを迎えました。

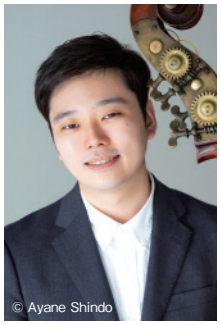
大槻 健（おおつき けん）（コントラバス）出身：奈良県

入団にあたっての意気込み

素晴らしいオーケストラに所属できることをとても光栄に思います。過去のセクションメンバーをみても名だたる奏者が所属されており、その末席に名を連ねることに畏怖とともに情熱を燃やしております。個性を残しつつもKCOの音楽に身を捧げたいと思います。

コントラバス奏者になったきっかけ（楽器との出会い）

大学受験を考え始めた時に、高校の卒業生の方に音楽家という道を示していただきました。最初は、いやいや自分なんて、と思っていましたが徐々にその気になり、両親を説得してこの道に入りました。そんなときに出会ったのが菅沼希望くんで、彼の素晴らしい音楽と技術に触れ、自分も同じ学校に行きたいと東京藝術大学を受験しました。


© Ayane Shindo

好きな作曲家

ラフマニノフ、シベリウス、シューベルト、シューマン、ベートーヴェン

趣味

ゲーム、車、料理

現在のマイブーム

以前ある企業から車をお借りする機会があってからすっかりドライブにハマってしまいました。休日は凝った料理を作ってみて失敗したりしています。

菅沼 希望（すがぬま のぞみ）（コントラバス）出身：千葉県

入団にあたっての意気込み

KCOのメンバーとなり、一緒に演奏できることをとても嬉しく思います。大槻くんは大学の同級生で、初めてKCOに出演した際も彼と一緒でした。諸先輩方が紡いできたKCOの歴史を未来につなぐことができるように、精一杯演奏したいと思っております。

コントラバス奏者になったきっかけ（楽器との出会い）

ジュニアオーケストラに所属していたことで、ずっとオーケストラで演奏したいと思い、プロを目指すきっかけになりました。

© New Japan Philharmonic

好きな作曲家

ブルックナー

趣味

DIY

現在のマイブーム

趣味のDIYにまつわることですが、色々なものを浮かせることにハマっています。

紀尾井ホール室内管弦楽団
2024年度シーズン・メンバーのご紹介

室内オーケストラで研鑽を積みたい若手演奏家を育成するための、シーズン・メンバーが決定しました。2024年度の定期演奏会に出演いたします。どうぞ温かいご声援をお送りください。

山口 絢（やまぐち あや）（ヴァイオリン）

山本大心（やまもと たいしん）（ヴァイオリン）

古市沙羅（ふるいち さら）（ヴィオラ）

若手指揮者育成支援制度

次世代を担う将来有望な若手指揮者の研鑽活動を支援するために「若手指揮者育成支援制度」を設けています。2024年度の対象者は以下の3名に決まりました。

佐藤秀義（さとう ひでよし）

福澤佑樹（ふくざわ ゆうき）

丸田隼輝（まるた はやき）

今号の表紙

『お客さまをご案内するプロフェッショナル』

撮影協力：株式会社ヴォートル

紀尾井ホールは開館以来、株式会社ヴォートルがお客さまのご案内業務を担っています。チケットのもぎり、客席案内、クロークサービスほか、具合の悪いお客さまの救護を行うことも。多岐にわたって公演を支えています。

紀尾井ホールにご支援いただいている企業および個人の方々です

紀尾井サポートシステム会員（五十音順・「株式会社」等表記及び敬称略）

《特別協賛会員》住友商事／日鉄ソリューションズ／三井不動産／三井物産／三菱商事／三菱地所

《みやび会員》 伊藤忠商事／大島造船所／鹿島建設／商船三井／菅原／住友商事／Dr.かすみ永田町クリニック／日本郵船／丸紅／三井住友銀行／三井住友信託銀行／三井不動産／三井物産／三菱商事／三菱地所／メタルワン
ほか匿名2社

《ひびき会員》 大林組／オカムラ／高砂熱学工業／竹中工務店／東京きらぼしフィナンシャルグループ／山下設計

《みどり会員》 青鬼運送／赤坂維新號／今治造船／ヴォートル／エーケーディ／荏原冷熱システム／ザ・キャピトルホテル 東急／三協／清水建設／上智大学／西武リアルティソリューションズ／大成建設／千代田商事／テェイスト・ライフ／東芝ライテック／永田音響設計／ニュー・オータニ／ハウス食品グループ本社／パナソニック／みずほ証券／三菱UFJ銀行／三菱UFJ信託銀行／三菱UFJモルガン・スタンレー証券／ミュージション／明治座舞台／ヤマハサウンドシステム／ワークショップ21

《あおい会員》 青木陽介／浅沼雄二／淺見 恵／石崎智代／磯部治生／伊藤眞理子／井上善雄／岩城宏斗司／上野真志／馬屋原貴行／大内裕子／大垣尚司／大久保なほ子／太田清史／小川 保／小倉 ヒロ・ミヒャエル／糟谷敏秀／片山國正／片山能輔／加藤巻恵／加藤優一／神川典久／川口祥代／川島知恵／菊池恒雄／木谷 昭／楠野貞夫／栗山信子／河野紗妃／小坂部惠子／斎藤公善／齋藤幸子／坂詰貴司／坂根和子／佐久間庸行／佐部いく子／澤田紀子／潮崎通康／柴田雅美／清水 正／清水多美子／清水康子／白土英明／末岡明武／鈴木順一／鈴木 亮／高下謹壱／田中 進／戸田純也／外山雄三／中塚一雄／中西達郎／中野洋子／中村健司／中山昌樹／名取正夫／原田清朗／藤村行俊／冬木寛義／北條哲也／堀川将史／牧本惠美子／松枝 力／松尾芳樹／松本美恵／丸井正樹／水口美輝／簑輪永世／宮島正次／宮田宜子／宮武悦子／宮原 薫／宮本信幸／陸田 実／村上喜代次／村上敏子／持留宗一郎／八木一夫／八木晶子／矢田部靖子／山内寿実／山口 彰／山口 聡／横手 聡／吉見 亨／渡邊一夫／渡辺弘次／渡辺由香里
ほか匿名49名　計250口

（2024年4月1日現在）

特別支援会員（五十音順・「株式会社」等表記略）

アステック入江／五十鈴／NS建材薄板／NSユナイテッド海運／NSユナイテッド内航海運／エヌエスリース／エヌテック／王子製鉄／大阪製鐵／九築工業／草野産業／黒崎播磨／合同製鐵／鴻池運輸／小松シヤリング／山九／産業振興／三晃金属工業／サンユウ／三洋海運／山陽特殊製鋼／ジオスター／新日本電工／スガテック／大同特殊鋼／大和製罐／高砂鐵工／高田工業所／鶴見鋼管／DNPエリオ／テツゲン／電機資材／東海鋼材工業／東邦シートフレーム／トピー工業／日亜鋼業／日鉄SGワイヤ／日鉄エンジニアリング／日鉄片倉鋼管／日鉄環境／日鉄ケミカル&マテリアル／日鉄建材／日鉄鋼管／日鉄鉱業／日鉄工材／日鉄鋼板／日鉄興和不動産／日鉄スチール／日鉄ステンレス／日鉄ステンレス鋼管／日鉄精圧品／日鉄精密加工／日鉄ソリューションズ／日鉄テクノロジー／日鉄テックスエンジ／日鉄ドラム／日鉄物産／日鉄物流／日鉄プロセッシング／日鉄保険サービス／日鉄ボルテン／日鉄溶接工業／日鉄レールウェイテクノス／日本金属／日本触媒／濱田重工／富士鉄鋼センター／不動テトラ／北海鋼機／幕張テクノガーデン／三島光産／宮崎精鋼／吉川工業／ワコースチール
日本製鉄

（2024年4月1日現在）

紀尾井だより 5〜6月号 2024年(令和6年)5月1日発行[隔月発行・通巻165号]●企画・編集発行：公益財団法人 日本製鉄文化財団 内田勇人●編集・デザイン・印刷：株式会社 エイチ・アンド・アール プロモーション

フォトレポート

1.21(日) クァルテットの饗宴2023 エスメ四重奏団

ヨーロッパを中心に躍進中、世界が注目するクァルテットが紀尾井ホールに初登場しました。軽快なハイドンの《ご機嫌いかが》からベートーヴェンの大曲まで、若々しさと情熱溢れる演奏を聴かせてくれました。

© 逢坂聡

1.26(金)・27(土)・28(日) 日鉄ソリューションズ プレゼンツ KCO名曲スペシャル ニューイヤー・コンサート 2024 紀尾井ホール室内管弦楽団 特別演奏会

協賛：日鉄ソリューションズ株式会社

昨年に続き今年も開催しました、KCOと新年を祝うコンサート。前半はモーツァルトのヴァイオリン協奏曲でホーネックが弾くヴァイオリンをたっぷりと。後半はウィーン風に賑やかで華やかな楽曲の数々をお届けしました。

© ヒダキトモコ

2.12(月) 邦楽 明日への扉 第3回 常磐津千寿太夫(常磐津節)

本格的な自身のリサイタルは初めてとのことで緊張した面持ちでしたが、常磐津節の代表曲を三番、勇壮に語られました。ロビーにはご自身で準備された資料や本をポスター展示して、常磐津の魅力を目と耳で楽しめる工夫がなされていました。

© 堀田力丸

2.18(日) アウグスティン・ハーデリヒ 無伴奏ヴァイオリン・リサイタル

16年ぶりに紀尾井ホールでのリサイタル。バロックから現代まで幅広い無伴奏曲を演奏し、その美音に会場全体が息をのんで集中していました。言葉にならない素晴らしい演奏でした。

© 武藤 章

2.22(木) 三菱地所 presents 紀尾井 明日への扉 第38回 本堂竣哉(ピアノ)

協賛：三菱地所株式会社

アンケートより

バッハ愛溢れる輝くような演奏、更に緩急強弱静動、すべて盛り込んだ渾身のベートーヴェン、あの若さ、あの細さで迷いのない音楽表現に感動しました。アンコールなしにも驚きつつ、その理由に納得の最後のスピーチ。とても楽しく感動しました。

© 堀田力丸

2.29(木) 音楽でつづる文学7 源氏物語 —女三宮と柏木—

源氏物語の登場人物、女三宮と柏木に焦点を当てた今回。前半はスライドを使って源氏物語と今日の演目について解説しました。後半は女三宮と柏木が登場する3作品が演奏され、源氏物語の世界にたっぷり浸るひとときとなりました。

© ヒダキトモコ

チケットのお申込み

紀尾井ホールウェブチケット https://kioihall.jp/tickets

お知らせ 2023年12月発売の主催公演より チケットぴあ、イープラス(クラシック公演のみ)に加え、CNプレイガイド(電話予約:0570-08-9999/10:00〜18:00年中無休)でもチケットを取り扱っています。

紀尾井ホール
公益財団法人 日本製鉄文化財団
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号
TEL.03-5276-4500(代表) FAX.03-5276-4527 https://kioihall.jp

公演の最新情報などはこちら